
メランコリックの揺れる庭

珀志水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メランコリックの揺れる庭

【Nコード】

N9125R

【作者名】

珀志水

【あらすじ】

兄と二人、放り出された見知らぬ世界。10年その世界で生きた？私？は、銀狼のリシタと共に王都、レッターニヤへと足を向ける。一つの真実を確かめるために。連理の咲く庭の大本のお話なので多々似たところがありますが、登場人物、世界観、設定、ストーリー、どれも全く違います。特に世界観。完結済み。番外編を気が向いたら更新予定

序

兄と二人、放り出された見知らぬ世界の限られた場所で7年生きた。

世話をしてくれたおじいさんに、文字や言葉、この世界で生きて行く術を教わった。

おじいさんが死んだその後の3年は、一人と一匹、世界を放浪して生きた。

いろんなものを見た。

一面のオーロラに覆われるように緑に光る空とか、熊みたいな大きさの二足歩行の猫とか、ミニチュアサイズのヨーロッパ風の小人の街とか、木蓮のような花から妖精が生まれる瞬間とか、土砂降りのけれど幻影のように体を濡らすことなくすり抜けていく雨とか。

たくさんたくさん、不思議なものを見た。

とてもきれいで、幻想的で、その一つ一つに魅せられた。

時にはとても怖いものやおぞましいものも見ただけで、それでも私はこの世界が好きだと言えるくらい、とても素敵なものたちを見た。

優しくて温かい、人や動物たちも大好きだ。

でも。

でも…。

私はそれと同じくらいこの世界が大嫌いだ。

「リシタ」

人よりも大きい銀狼の首に顔を埋めるように抱きつく。

薫る獣独特の匂いを体いっぱい吸い込んで、酷く安心した。

この存在だけは、まだそばにいてくれる。

「決めたよ。今度は王都に行こう」

世界を放浪し、いろんな所へ行っただけで、けどずっと、避けていた場所。

現実から目を背けてきた私は、とても罪深い生き物なのだと思う。

今だって、決めたと言いながら逃げたくて仕方ない。

行きたくない。

それこそ現実を突きつけられたら、悲嘆に暮れるしなくなる。

多分きつと、私は生きることすら忘れてしまうのだ。

それでも。

「リシタ。ニイニはまだいるかな」

大丈夫だとも言うように擦り寄ってくる銀狼に、私は今だけはと涙に溺れた。

序（後書き）

上中下の三篇：で収まったらいいな。
とりあえず5話前後の中編です。

賑わう街並みをぼんやりと眺める。

整備された石畳の道を馬に似た四足の動物が荷物を引いて走っていく。

大きな広場では旅商たちが露店を開いていて、まるで縁日みたいだ。

流石は王都レッターニヤだなどと、変に感心をしながらその広場の中心にある噴水の縁に腰掛け、そこから見える、聳えるようにして立つ城を見上げた。

記憶に残る絵本の中のお城そっくりで、少し、現実感が薄らぐ。夢の中にいるような不安定さに、このまま夢として目覚められればいいのにと馬鹿みたいな感傷に浸った。

「宿、とらないとな」
纏わりつくような感傷を振り払うように立ちあがる。

銀狼であるリシタは、街に入る前に置いてきた。
人以上に頭もよく、優しい穏やかな性格だけれど、人はリシタを恐れる。

何かのはずみでリシタを傷つけられたら、たまらないのは私だ。
あの存在だけは誰にも奪われたくない。

「お嬢さん、見ない顔だな」
歩きだそうとした私の背後から聞こえた声に、それが自分に掛けられたものだと気付くのに一拍遅れた。

自分の今の恰好が男装だったからだ。

「……」
振り返った先にいたのは、浅黒い肌の背の高い男だった。

「何か」

にこやかに、気安い感じの笑みを浮かべているその男を警戒しながら、短く問う。

「お嬢さん、レッターニヤは初めてだろう？」

「それが、何か」

「財布、すられてないか？」

「……へ？」

バツと腰にさげていた財布代わりの革袋の存在を確かめる。

けれどあるはずのそれはなく、無残に切られた革紐だけが揺れていた。

「ほら」

あまりのことに顔から血の気が引いて立ち尽くしていると、男に手を取られぽんつと何かを握らされた。

無くなったはずの財布だ。

「……どうして」

「放っておいてもよかったんだが、ちょうどそのスリ野郎に用があったんでな。いい獲物持つてるみたいだが、気をつけなきゃ意味がないぞ」

この男は千里眼でも持っているのかと疑いたくなった。

女であることを見破られたところか、肩から提げている荷の中身まで見破られるとは。

驚きに固まっている間に、男は「今度は気をつけるよ」と人ごみに紛れるように立ち去っていた。

「……お礼言い忘れた」

ああ、でも行きずりの男だ。

もう会うこともあるまいと、男が去っていった方向に軽く頭だけ下げて、宿へと向かった。

一夜が明けて、旅の疲れも十分に取れた私は、その日一日を街の探索に費やした。

昨日の経験も踏まえて、財布の革袋は首から下げている。賑わいを見せる表通りも、貧困に喘ぐ裏通りも、田舎のように長閑な時間だけが流れる公園も、一つ一つを確かめるように歩いた。

途中、パンの露店を見つけ、小ぶりのパンを一つ買って食べながら歩いた。

「平和つつたら平和…?」

大きな街に光と影があるなんてことは普通だ。

当たり前すぎて特に注視するほどのことじゃない。

「うーん…」

平和だからいい、とは言えない。

でも平和から程遠ければそれはそれで悲しい。

何ともいえない気分で歩きながら、食べ終わって残ったパンの包み紙をぐしゃりと握りつぶす。

「必要か、必要じゃないか…」

街を見ただけではわからない。

わかつたら楽なのに。

リシタだつたらわかるだろうか。

「ただそれだけが知りたいのに」

「何を？」

「ひうっ！」

耳元で聞こえてきた声に、悲鳴をあげそうになって慌てて口を手でふさいだ。

聞き覚えのある通りに、そこにいたのは昨日の男。

「こんなところまで入り込んで、危ないって」

こんなところと言われて、あたりを見回す。

入り組んだ路地裏を道なりに歩いてきたが、どうやらかなり奥まで入り込んでいたようだ。

目の前の男はそんな私を追いかけてきたのだろうか。

だとすればそれはかなりのの…。

「…お節介？」

よくて世話焼き？

普通、放っておくだろうに。

「んだと？」

「あ、いや…昨日といい、どうもありがとうございます」

低い声に目を泳がせながら、とりあえず昨日言いそびれた礼を言う。

頭を下げればふつと笑われた。

「ほら。表戻るぞ」

手を差し出され、思わず瞬いた。

まさか、この手を握れと？と見つめていると、呆れられたように溜息を吐かれ、強引に手を取られて歩きだす。

男の歩幅と合わなくて小走りになりながらついて行く。

その歩幅が少しずつさりげなく合わされて、男の隣を手をつないで歩いた。

これがただの男のお節介なのか、それとも裏に何かあるのかは知らない。

ただ私は、隣を歩く男に、握られた手のぬくもりに、遠い昔の記憶を重ねて、振り払うことも出来ずに俯いて黙って歩いた。

近づいてくる喧騒に顔をあげると、表通りが覗く路地裏まで来ていた。

「ここまでくれば大丈夫だろう？お嬢さん」

「…そのお嬢さんってやめて」

「いや、まだ14くらいだろ？なら」

「私もう20なんだけど」

この世界で幼く見られるのは慣れていているけれど、お嬢さん呼ばわりされる謂れはない。

この世界で？お嬢さん？と呼ばれるのは、成人前の17までだ。

不貞腐れた様に訂正すれば、男は気まずげに手を離れた。

「悪い。まさか成人してるとは思わなかった。…ええつと」

「ミイって呼ばれてる。貴方は？」

名を問えば気をよくしたように、男の表情が和らいだ。

「俺はジン。よろしく、ミイ」

私より年上らしい男は、やっぱりどこか子供扱いで私の頭を撫ぜ
回した。

「城の中…?」

「入れるのかなあって」

自然な風を装ってジンを見上げると、庭園までなら開放されているとのことだった。

そこまで行くのかと聞かれ頷けば、なら案内するとまた手をひかれる。

きつと、傍目から見れば私たちは仲のいい兄弟にでも見えるのかもしれない。

そう思うと、繋がれた手も気にならなかった。

道すがら、目についたモノを指差して問えば、ジンは機嫌よく答えてくれた。

やはり世話好きなのだろうと、楽しげに話してくれるジンの横顔を見て思った。

城門の前まで来たところで、門番の兵にジンが話をつけてくれたためか、城内へ入るのに案内の人をつけてもらえた。

「じゃあな。迷子になるなよ、ミィ」

「うん。ありがとう、ジン」

やっぱり子供扱いで、私の頭を一撫でしてからジンは立ち去った。ジンの背中を見送ってから、案内人である女の人を振り返る。

どう見ても騎士様の恰好をしているように見えるその人は、私が振り返るとにこやかに自己紹介してくれた。

「初めまして、アイリーンと申します。今日は城内の案内を務めさせていただきます。質問などがありましたらなんなりとお聞きください」

「丁寧にありがとうございます。僕はミイです。よろしくお願いますね」

差し出された手を取り握手を交わすと、アイリーンはこちらですと中へと案内してくれた。

開放されている区画は、庭園だけでなく騎士の鍛錬場などもあるとのことで、庭園を通り過ぎる形でそちらの方も案内してもらったことにした。

「今はリシアアの華の季節で、この時期の王城を純白の乙女の庭と呼ぶこともあるんです」

「リシアアは、薄紅色の華では？」

以前見た華の色を思い浮かべて首を傾げれば、ご覧下さいと前方を指差され目を瞠った。

まるで雪を被ったかのように、庭園が咲き乱れた華で埋め尽くされている。

「白い……」

「この王城で咲くりシアアは全て白い花をつけます。とても綺麗でしょう？」

「……ええ」

綺麗だけど、何故だろう。

とても切ない気分させられた。

胸の奥をぎゅっと握り潰されるような感覚に泣きたくなる。

リシアアの咲き乱れた庭園を抜け、鍛錬場に着いた時にはすっかり気分が沈んでいた。

「ミイさん。こちらが鍛錬場になります」

案内されたのは、円形の闘技場の観客席。

二階か三階の高さから、闘技場を見渡せた。

剣の鍛錬が行われているのがよく見渡せ、私は小さく声をあげた。

「すごいですね」

「今日は公開の模擬戦もありますから、よろしければ見て行ってくださいね」

「それは是非とも！」

模擬戦とは楽しみだなと心躍らせる。

それまで時間があるからお茶でもと言われ、お言葉に甘えることにした。

鍛錬場の近くにある騎士舎のオープンテラスで、アイリーンは香りのいい紅茶を淹れてくれた。

「ふふつ。ここは女騎士の者しか使わないので、この時間はとても静かなんです」

「いい場所ですね」

お世辞ではなく、本当に気持ちのいい場所だった。

心地いい風と木陰になるくらいの緑、聞こえてくるのは木々のざわめきや鳥の鳴き声くらいだ。

アイリーンの嫺やかな声に耳を傾けながら会話を楽しんでいると、鍛錬場のある方角とは反対、王城が見える方角から喧騒が近づいてくるのを感じ、二人で顔をあげた。

なんだろうと顔を見合わせて、近づいてくる喧騒を待ち構える。

やってきたのは神官服を来た男たちだった。

「大神官…？」

困惑した様子でアイリーンが立ちあがり、片膝をつけて礼を取った。

そんなアイリーンを素通りして、男の一人が私へと近づいてきた。縫いとめられたように体が動かさず、私はじっとその男を見つめる。

心臓が早鐘を打ち、咽喉が引きつる。

嫌な予感しかしなかった。

男たちが両膝を折り、地面に手をつけて頭を下げたのを見て、顔に熱が灯るのを実感した。

羞恥にではない。

怒りに、だ。

「お姿を拝見できるとは尊き誉れ。お待ちしておりました、神子様」
ひくりと咽喉が鳴った。

猛烈な怒りに、涙さえ滲んで。

椅子の脇に置いてあった荷を引っ掴み、素早く荷の紐を解いて荷を取りだし、男へと向けた。

「ふざけるなよ……？」

震える声に、男たちだけでなくアイリーンも顔をあげた。

「アンタ、今なんて言った？神子？つは、笑わせんなよ？神からの賜りものの神子！？私が！？ふざけんなよ？その神官服は偽物か？え？この期に及んで、私を神子！？……死ねよ」

死ねよ。荒げられた声の中で、その言葉だけは抑えられた低い声で冷たく響いた。

男に突き付けた荷　抜き身のままの剣をつつと首に滑らせる。

赤い血が、男の首に滲んだ。

「死ねよ。死んで詫びろ」

動こうとした男の腹を蹴り上げ、倒れたところを足で胸を踏みつけることで抑え込んだ。

「大丈夫、楽には死なせない。少しずつ肉を削いで、苦しみに喘がせてやるよ。痛みと絶望に叫べ。そして知れ」

自らが犯した罪が如何に重いかを。

剣を構え、狙いを定めて切りつける。

けれど、剣先が男に届く前に、強い力に腕を取られ、地面に押し倒されていた。

「お前は……！何をしてるんだ！」

「……………ジン？」

いつの間にか手から弾かれていた剣は、アイリーンの手に握られ、ジンが私の上に馬乗りになっていた。

目の前にジンがいることが、私には心底不思議だった。

何故彼がここにいるのか。

ふと違和感を覚え、瞬きを繰り返す。

「ジン……？」

つい先程私と共にいた、街に溶け込んでいた世話好きの青年では

なかった。

上等な服に身を包み、奔放というほどではないが跳ねていた髪は綺麗に撫でつけられていて。

見るからに上流貴族様なその姿に、私は何故か涙を流した。

「あははっ」

体の奥底から突き上げてくるような乾いた笑いに身を任せ、狂ったように笑い続ける。

「ミイ…?」

「ははっ…。ねえ、ジン」

涙で滲んだ視界に、彼の顔もはっきり見えない。

でも私は無邪気に笑って見せた。

「あなたはだあれ？」

これはなんていう喜劇だろう。

滑稽すぎて、もう笑うしかないじゃないか。

「あなたはだあれ？」

返されない答えに同じ問いを繰り返す。

「ミィ…何を」

戸惑いの表情も笑いを煽る要素にしかならなくて、呑みこんだ笑みに肩が震えた。

その反動で涙がこめかみを伝う。

閉じた瞼の裏で大切な家族を思い浮かべた。

次いで思い浮かべたのは、唯一無二の存在。

リシタ。

リシタ、リシタリシタリシタリシタリシタ。

お願い助けて。

ここにはいない、綺麗な銀の獣に必死になって助けを求める。

苦しい。

目の前に晒されるだろう真実が、きつと私には痛い。

今でさえこんなに苦痛だというのに、そんなのきつと耐えられない。

「たすけて、りした」

呂律の回らない言葉は酷く幼く、掠れて聞こえた。

周囲が俄かに騒々しくなり、私にピタリと視線を合わせていたジンも顔をあげる。

「なっ…！？フェンリル!？」

驚きに顔を染めたジンを何かが吹き飛ばした。

「陛下!？」

アイリーンの悲鳴と、人の集まる気配。

一気に軽くなった体を起こしてジンを目で追えば、しっかりと受け身を取っていて、大事には至っていないようだった。

それにほっとしながら、影を落とす背後の存在へと顔を向ける。

「リシタ」

乞うように手を伸ばせば、銀狼は人へと姿を変えた。

銀髪の髪に金色の瞳をして、体を纏っていた毛皮は上質な服へと変わる。

造作のいい顔はひんやりとした印象を受けるけれど、その瞳がとても優しいことを私は知っていた。

「リシタ」

包むように抱きこまれて、心の底から安堵した。

少しだけ獣の匂いがするリシタの首筋に顔を埋めて泣く。

一頻りそうしてから、ジンたちを見れば血の気が引いた顔でこちらを見ていた。

リシタが恐いのだろうと結論付けて、ジンだけを視界に捉える。

先程、アイリーンが彼を「ヘイカ」と呼んでいた。

彼からではないが質問の答えを貰い、私はリシタの隣で毅然と立ち、ゆったりと神官の礼をとった。

「カユザク国王陛下、ジルラーン・アルチュセル・カユザク殿に問う」

外れない視線の先で、ジンが息を呑む。

「神子が必要か、否か」

どちらの答えを貰っても、私は声をあげて泣くだろう。

怒り、絶望、安堵、そのどれか、そのどれもかは知らないが。

肩に添えられたリシタの手が、緊張に冷えた体を温めてくれた。

そろりと開かれた口に、ぎゅっと拳を握った。

「国としては欲しいのだろうな。神子が持つ力も魅力的だ。だが、

俺はいらない」

神官たちからは非難の声が上がった。

私は、私はただ泣くのを堪えるのに必死だった。

「いら、ない…?」

「ああ。必要ない。俺にはもう、傍にいてくれる者がいるから」

「…そう」

なら、 はどこへ行けばいいの？

声に出しかけた問いは、咽喉に張り付いて言葉にならなかった。

リシタの腕に縋るように抱きつく。

リズムよく背中を叩く手を感じながら、波立つ感情を抑えた。

「こんにちは」

今日初めて聞いたリシタの声に顔をあげる。

「…ニイ、ニ?」

ふんわりと、まるでたんぽぽの綿毛みたいに漂う、透けた体の

兄。

死んでしまった証みたいなの姿に、ひくりと咽喉を鳴らしなが

ら、それでも泣かないようにと涙をいっぱいに溜めた瞳でその人を

見つめる。

伸ばした手に、透けた手が重なってじんわりと温かい。

につこりと笑うその人は、ゆっくりと唇を動かした。

聞こえてこない声に、言葉を追うように私は代わりに声に出した。

「さ・よ・う・な・ら?」

瞬間、大きな風が駆け抜ける。

巻き上げられた白い花弁が、雪のようにレッターニヤに降り注い

だ。

銀狼が森の中を駆けて行く。

森を抜け、見晴らしのいい場所まで来て、足を止めた。

「…つつわぁ」

銀狼の背から下りて、景色に見入った。

「すごいね、リシタ」

蒼い蒼い空よりも深い蒼が揺れる森の先にある野原が、王都を囲むように存在していた。

全て花の色だ。

「ニイニの色だ」

何より蒼を好んでいた兄の姿を思い浮かべ、少しの淋しさと一緒に懐かしさを覚えた。

あの時吹いた風は、王都全体を駆け抜け、全ての花の色を蒼色へと変えていった。

それが兄が残した置き土産のようで、切ない。

「美衣」

いつの間にか人の姿になっていたリシタに抱きしめられる。

「ね、ニイニはまだいるかな」

いつかした問いかけに、リシタは綺麗な微笑みを浮かべる。

その微笑みだけで、もう充分だった。

蒼く染められた花々は、一日を待たずに散っていき、ゲンソウカ幻蒼華と後に呼ばれるようになる。

ただ一つ。

王城の庭園のリシアーだけはその色を保ち続け、決して白に戻ることはなかった。

純白の乙女の庭と呼ばれた庭園は今、天涙の庭と呼ばれている。

下(後書き)

…後1話

終

静かな死だった。

苦しみの声さえない、でも眠るような穏やかさなんてかけらもない、苦痛にまみれた死。

どうしてこの人はこんな死に方をしなければならぬのだろう。

辛くて痛くて、私は声もなく泣いた。

愛されていたんじゃないのか。

求められたはずじゃなかったのか。

何でもいい。

誰かに問いただし、喚き散らしたかった。

この人は縊られてこの世界に来たのではなかったのか。

7年暮らしてきた神殿の敷地の隅に、三日三晩かけて兄の墓を作った。

本当ならもつと立派だっただろうそれも、私の非力な腕力では歪もいいところだ。

「一人に、なっちゃった」

崩壊した涙腺は、未だに治らずにまだ涙を流す。

出来あがった兄の墓。

その隣にも一つ同じように歪な墓がある。

この神殿にいた神官のジエイクの墓だ。

ジェイクは兄の数日前に亡くなっていた。

唯一の家族と、この世界で唯一の知り合いを失って、もうどうすればいいのかわからない。

この神殿の外を私は知らない。

鳥籠のように兄だけを捕え、決して出さない神殿の外に興味がなかったわけじゃない。

ただ、出られない兄の手前、出るのが忍びなかったただけだ。

ジェイクの外に出ても生きていけるだけの知識を貰ったけれど、未知の世界に足を踏み出せるほど私は強くなかった。

「ニイニ…」

ほぼ眠らずに行なった墓作りで疲れ切った体が、休息を求めて眠りの淵に意識を落としていく。

このまま、二度と目覚めることがなければいいのに。

そう願うことを止められなかった。

けれど私は生きていて、現実是否応なく私を引き寄せる。

「みーちゃん、どうしてそんなところで寝てるの。風邪ひいちゃう

よ」

聞こえてくるはずのない声とともに。

ねえ、神様。

この世界に兄を求めた神様。

アナタは兄をここまで縛り付けて、貶めて、不幸にすることが望みなのですか。

神子は神殿から、王の迎えがなければ出ることは許されない。

王なくして、神子には自由すら与えられないのだと、それを聞いた私はまるで奴隷のようだと思った。

神が王に遣わした、奴隷。

それがまさか、死してなおのこととは誰が思おう？

生前と同じ、ただジェイクがいなくてだけでさして変わり映えのない日常を兄と二人繰り返す。

和やかな日常を繰り返す狂った世界の中で、狂えないからこそ発狂しそうな精神に、苛まされた。

そんな中で、兄が少しずつ日常を変えていった。

「みーちゃん。あそこに花壇作るうか」

畑ともいえる家庭菜園の世話をしていた時、兄が神殿の庭先を指し示して言ったことが始まりだった。

花の種なんてものはないから、それまで出たことのなかった神殿の敷地の外に、私が花を取りに行つて少しずつ植えていく。

花だけじゃなく、目についた木の実とかも摘んでいって、食べられそうなものだけ兄と二人齧つてみたりした。

和やかといえれば聞こえがいい、ただ単調な日常に少しずつ色がついて…。

時間だけは無駄にあつたせいとか、一週間もするころにはそれなりに見栄えのする庭ができていた。

「あ、蒼い花。綺麗だね。ありがとう、みーちゃん」
本当に嬉しそうな兄の笑顔。

でも、その笑顔と裏腹に、私の心は締めつけられる。

この人は、私が死んだ後もこうして日々を繰り返すのだろうか。

来ることのない迎えを、来ることのない王を、待ち続けなければならぬのだろうか。

誰に打ち明けることも出来ない胸の内で、悶々と悩み続けるだけで打開策なんてあるはずもない。

神殿の周囲なら出ることが当たり前になって、その日も花を探しながら歩いていると、大きな音がして顔を向けた。

「……………狼？」

人より確実に大きいだろう獣がいた。

銀色の毛並みは木漏れ日でキラキラと光つてとても綺麗で、思わ

ず魅入ってしまう。

「綺麗……」

知らず手を伸ばした私に、その獣は鼻先を擦りつけてくる。人に慣れているのかと考えていると、匂いをすりつけるように擦り寄られた。

どうすればいいのかわからずに硬直していると、ぺろりと口を舐められる。

「ふえっ」

吃驚してるとさらに驚愕な出来事が起きた。

その獣が人の姿に変わる。

兄とジェイクの顔しか覚えていない私に、人に関しての美意識はないに等しかったが、それでもその人物が美しいと思った。

獣の時とは違う意味で魅入っていると、ぎゅっと抱きしめられる。身長差に胸に顔を埋める格好になってしまい、その胸の硬さに男だと知った。

「うん。これがいい」

「……うん？」

声もいいなあと聞き入っていたが、訳のわからない言葉に首を傾げた。

「頂戴」

何を？と問う前にかっぷりと首に噛みつかれた。

「いっ……！」

痛みに顔を顰めている間に、うっすらと滲んだ血をペロペロと舐められる。

訳のわからなさに目を白黒させていると、男はあどけない笑顔で浮かべた。

「俺の。俺の伴侶」

獣の時みたいに尻尾があればぶんぶんと振られていそうだと、現実逃避することで男の言葉を聞き流した。

リシタと名乗った男を連れて一先ず神殿へと戻ると、兄が恐い顔

をしていた。

初めて見る兄の怒った顔に、この男を連れてきたのはいけなかっただろうかとビクビクしていると、そんな私に気付いた兄はいつもの優しい表情で私の頭を撫でてくれた。

「僕の妹にマーキングだなんて、何してくれてんだよ。この馬鹿犬」
地どころか地獄まで這つていそうな低い声に、やっぱりビクビクする羽目になつたけれど。

兄は神子のためか、私とは違いこの世界のあらゆる知識をこの世界に來た時から持っている。

だから人の姿をしているリシタを馬鹿犬と称したことに驚きはなかった。

「美衣、とてもいい匂いがしたから」

兄の怒りなぞ露ほど気にした様子もなく、リシタが言う。

そのあどけなさに、兄は怒っているのも馬鹿馬鹿しくなつたようだった。

これ見よがしに大きく息を吐いてから、ふつと笑つて私を見る。

「ちょうどいい機会かもしれない。ねえ、みーちゃん。外を見ておいで」

「…なに、言ってるの?」

「とても綺麗なモノがいっぱいあるよ。みーちゃんの知らないもの、たくさんあるんだ。ね、この世界を憎まないで。素敵なモノ、たくさん見て、好きなモノ、一つずつ増やしていこうよ」

その言葉に、私は泣いた。

ああ、この人は神子なんだなと、悲しくなった。

一度は死んで、今だって、触れられるけどこれは魂みたいなもので、こんな姿になつてまで縛られてるのに、笑つてそれを甘受してる。

私がいなくなつて、一人きりになつても、この人は縛り付けられたまま、それを甘受するのだろう。

和やかに、穏やかに笑つて、きつと何十年…いや何千年という時

間ですら。

「美衣…？」

リシタに手をひかれ、足を踏み出す。
神殿を振り返ることはしなかった。

出来なかった。

温かく無慈悲な場所に兄が佇む姿をこれ以上目に焼き付けたくな
かった。

「リシタ。まずはどこ行くの？」

「南。人の街があるから」

開け放たれた世界と新たに手に入れた繋がりだけ。

それだけを胸に、歩きだすことを決めたから。

銀狼の尻尾に包まって眠っていたところをふつと眼を覚ました。

懐かしい、夢を見た。

リシタに出会ったころの、この世界を放浪する少し前の夢。

「…庭」

一ヶ月とかからずにつつたあの庭の花壇に、花はまだ咲いている
のだろうか。

もしかしたら枯れてしまっているかもしれない。

一度確かめに戻ろうか。

世話する人がいなくなってもう1年になる。

「ニイニ…」

あそこに戻るの辛いけれど、今なら、あの時とは違うものが見
える気がする。

そうしようと思えば、心は晴れやかだ。

まだ薄暗い空に、もうひと眠りしようと思えば私は瞼を閉じた。

設定資料（整理用）とあとがき（？）

整理用です

登場人物

美衣（ミイ） トリップ時10歳
兄とともに異世界に来た普通の少女
言葉も文字も一から習得した
鍛錬の末、少しだが剣を扱える
リシタの伴侶

リシタ

フェンリル（銀狼）

ミイを出会い頭にマーキング（伴侶認定：一生モノ）
人の姿の時は喋りが拙いが精神的に幼いというわけではない

美幸（ニイニ） トリップ時16歳

神子

死んで魂になっても縛り付けられてる不憫な人
異世界の言葉や常識、知識などはトリップしたときから自然と備わ
っていた

ジルライン・アルチュセール・カユザク（ジン）
国王様

すでに最愛の王妃あり
たまに城下町にお忍びで出かけたりしてる

アイリーン
カユザクの女騎士

世界観

ドラゴンがいたり、妖精がいたり、小人がいたりな中世的なファンタジー

剣や魔法もあり

以下あとがきと言う名のモノローグです

与えられた役割にそって動いたり、それに逆らったり、端から役割もなく気ままに過ごすトリップモノが多い中、ふと思いついたのが、役割を与えられているのに、それにそって行動する以前にそのトリップしてきた相手を迎え入れる側が相手の意向をまるつきり考えることなく拒否し、捨ておかれるのってないのかなあという…。

勇者…は、魔王などの悪がいなければ成り立たないし、召喚しておいて捨ておきとかなんだっていう感じなのでNG。

役割の曖昧な神子ならば書けそうだなと設定を練り始めたら、兄と妹がぽんつと浮かんだ。

神子な兄と巻き込まれた平凡妹。

捨ておかれて、でも自由に動けたら気ままに過ごすのとそう変わりが無いよなっでことで、閉じ込めて…。

うん、この時点で明るい話つてのが俺にはそもそも無理だった(汗)。
どんどん暗くなって、当初の設定ではミイはジンと恋仲になって子供まで産んだ後デッドエンド。

普通に生きてるニイニは外に出られて、ミイの死を悲しんで形式上

のみジンと結婚。

一夫一妻の国なので側室もなく、ジンはミィを愛したまま、ミィの子供と三人で生きていく…みたいな話だった。

あ、一応この頃にもリシタいたけど、ペットの感覚です。

デッドエンド考えといて何だけど苦手なもんだから、書くの断念。

死ネタはいいんだけど、主人公が死ぬの苦手なんだよね…。

で、新しく練り直したらこうなりました。

5編以内でおさめると決めただけど、内容としてはいろいろと補完したいところ…。

兄視点の話とか書きたいなあ。

連理は兄と妹と銀狼、神子閉じ込め設定だけ貰いっけ。

ストーリー基盤が全く違うので、上記のようなデッドエンドはありえないです。

ああ、長々と語ってしまった。

ここまで読んでくれたなんていう奇特な方いるんでしょうか。

いたとしたら長々と付き合わせてすみません。

読んでくださってありがとうございます。

フィランソロピストの庭（前書き）

兄視点。

グダグダ感がいつも以上に満載です

フィランソロピストの庭

風の音に混じって、小さく健やかな寝息が聞こえる。

泣き疲れ、目元を赤く腫らした少女が、盛り上がった土の上で眠っていた。

「みーちゃん」

肩を揺ると、むずがるように身じろがれる。

「みーちゃん、どうしてそんなところで寝てるの。風邪ひいちゃうよ」

うつすらと開かれた目が、彷徨い、僕の姿を捉える。

ぼんやりと見つめ、それから涙を滲ませて、小さな口が嗚咽を漏らした。

「にいに」

幼い頃から変わらない呼称が、なんだか酷く悲しげで、つられて泣きそうになった。

「ごめんね。」

心の内で何度も謝罪を繰り返す。

「ごめんね、あるべきはずの当然の未来を奪ってしまって。」

元の世界にいたら、可愛い制服を着て、恋の一つや二つ出来ただろうに。

「真っ黒だね。お風呂入って綺麗にしなきゃ」

努めて明るく言えば、今度こそ声をあげて泣かれてしまった。

宥めすかして抱きしめる。

「ごめんね。」

口をつけて出てはこない謝罪を繰り返す。

この世界で生きなければならぬ君に、僕がせめて出来ることは真綿のように抱きしめることだけだった。

突然すり替えられた世界は、以前に比べればなんと狭く、小さな物へと姿を変えた。

それに不満を抱いたことは一度としてなく、それ以上に、僕はこの世界を愛してやまなかった。

見たこともないものを当然のように知り、それらがどれだけ綺麗で醜いのかも全て僕の中にあって、そしてそれらを僕は無償で愛した。

僕の中で世界は完結していた。

ただ愛すべき世界として。

来るはずだった王の迎えも、来ようと来まいと僕には関係なかった。

閉ざされた場所で世界を嫌うことも、憎むこともなく、ただただ世界を愛でる。

世界に存在する全てを愛する神子は、いかなれば絶対的な博愛主義者だ。

それと引き換えに、世界に存在しうるすべてに特別な感情を抱くこともない。

この世界に来てからそんなふうに変わった僕の性質は、けれど、例外的に美衣への感情を変質させることはなかった。

ただ一人の肉親に対しての親愛は、今も変わることなく存在している。

それが、特別の範疇外だったのか、それとも美衣がこの世界の間ではないためなのか、理由は知れない。

「みーちゃん」

泣き疲れて眠ってしまった美衣の頬は、痛々しほどに涙が乾いた痕を残していて、罪悪感が募った。

僕だけを捕えるための箱庭は、美衣までをも絡め取り、動けないように雁字搦めにして。

外の世界へと出してあげたくても、非力な美衣一人放りだすのは死へと投げ出すようなものだ。

緩やかに流れる穏やかな時を愛しみながら、心の壊れかけた妹を必死にこの世界に繋いだ。

「あそこに花壇作るうか」

いつそ死んでしまったほうが、美衣にとっては楽だったかもしれないと知りながら。

少しずつ元の明るさを取り戻していく妹に、ほっとしながらもこの先の未来が不安だった。

このままではいずれ、また心を壊してしまう。

多彩な色がつき始めた庭を愛でながら、祈るように何かを待った。妹を、美衣を、ここから連れ出してくれる何かを。

僕の祈りが届いたのか、ただの偶然か。

日課となった花探しから戻ってきた美衣に連れられて、現れたのはフェンリルだった。

美衣の首にすでにつけられている刻印に、ふつふつと腹の奥底で怒りに似た感情が湧きあがる。

「僕の妹にマーキングだなんて、何してくれてんだよ。この馬鹿犬」
フェンリルの刻印は伴侶の証だ。

そしてその証を持つ者は、フェンリルと同等の寿命を得る。
人間なぞより遥かに長く膨大な寿命を。

背負わなくていいはずの運命に、僕の胸にまた一つ罪悪感が募る。
「美衣、とてもいい匂いがしたから」

だというのに呑気なまでにそう言い放つフェンリルを見て、気が抜けてしまった。
いい匂い。

フェンリルがいうその匂いには、美衣がフェンリルを拒絶しなかったことが窺えた。

意識的にも本能的にも、どちらも拒絶しなかったからこそ、フェンリルは美衣から“いい匂い”を嗅ぎとったのだ。

だからと言って、当人に許可も得ずにマーキングはいただけない。ただけないが…。

「ちようどいい機会かもしれない。ねえ、みーちゃん。外を見ておいで」

ここから出るには絶好のチャンスだ。

僕のせいでこの世界の全てを憎んでしまいそうな妹に、この世界がいかに綺麗なのかを見てほしかった。

そんな願いを感じ取ったのか、美衣は泣きながら、それでも頷いてくれた。

フェンリルに連れられて行ってしまふ背中に、木々に紛れて見えなくなるまで、ずっと手を振り続けた。

一人、残された神殿の中、庭を振り返る。

以前はなかった色とりどりの花が揺れている。

「みーちゃん」

一度も振り返らなかった妹を呼ぶ。

きっと、もう会うこともない。

何故なら、彼女がここに帰ってくることはあり得ないから。

迎えも来ないのだから、僕が外に出ることもなく、ならば会うこともないだろう。

「一人、か」

見渡す神殿はどこか広々として感じられる。

これが本来の姿で、だから、それ以上何かを思うことはなかった。少しだけ瞼を閉じて、それから顔をあげ、何も変わることはない、

あるべき日常へと足を踏み入れた。

フィランソロピストの庭（後書き）

庭は庭でも箱庭的な

フィランソロピストは慈善事業家ではなく博愛主義者で
ちなみにこの兄、自分が死んだことに気付いていません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9125r/>

メランコリックの揺れる庭

2011年4月23日18時27分発行